

巻頭言

人間学再発明宣言（仮）

京都文教大学人間学研究所所長 小林 康正

人間学研究所は来年創立20年目を迎えます。人間なら成人です。いったいどんな「大人」に成長したのか。一人前になっているのか。こう問い掛けてみるいい時期を迎えたのではないかと考えます。20年間の歩みをいったん棚卸して「人間学」の姿をもういちど確かめてみるのが、研究所の今後の方向性と可能性を見定める重要なステップになるはずです。

まず何故「人間学」という問い掛けだったのか。「人間学」は、この20年間に何を残してきたのか。そして、「人間学」という問いが今後も有用であり続けられるのか。来年（2015年）は、これらの問いについてしっかり考える年にしなければならない。このように考え、研究所では現在、回顧と将来展望を中心に据えたプロジェクトを準備しているところです。

ところで、こうして回顧と展望という、あまり新味がないと言えない企てを進めていくと、はたと次のような疑問も浮かび上がってきます。はたして人間学研究所という学際の方が「大人」然としてしまうことはよいことなのか、と。未熟であっても、はっしたる挑戦的な態度を保っていた方がよいのではないか。本学も20年という年月を経て、それぞれの部門が大人へと成長していく様子を見ると、全体としてそれはよいことだとわかっていても、何か物足りない気持ちにさせられます。一部であっても、大人たちを揺り動かし、一瞬でも初発の気概へと連れ戻

すいたずら坊主が一人くらいいてもよいのではないか。そんな闊達さを許す場をもつことが、学問の府の度量というものではないか。そんな気にさせられるのです。

いずれにしろ、本学が開学した20年前は依然として学問の「挑発」という言葉が有効性を保ちえていました。そもそも人間学研究所の宗旨たる「学際」という言葉には、既成の学を挑発、顛倒させる矜持があったはずでした。つまり、生まれつきのいたずら坊主というわけです。その意味で、人間学研究所はあっさりと大人びてしまうわけにまいりません（しかし、昨今の「大人になれ」という大号令の下、うかうかしていると、いつの間にかに成人式に連れて行かれて似非大人になってしまうかわかりません）。

ならば、今度の人間学研究所の回顧と展望も、もう一度その果敢な初心を取り戻せるような試み、「人間学」を再発明するくらいの意気込みの企画にしなければならないはずです。そもそも歴史を編むということは、それ自体創造的な試みであり、それは「発明」と言い換えてもいいのではないか。そんなわけで、人間学研究所の20年目の合言葉は、とりあえず「人間学再発明宣言」としてみたらどうかと考えたわけです。ただ今は、見通しも足下も心許ないゆえ仮の宣言にとどまります。願わくは、有志関係各位の積極的介入と賛助を得てなるべく早く本宣言を出したい。そのように切に願っているところです。